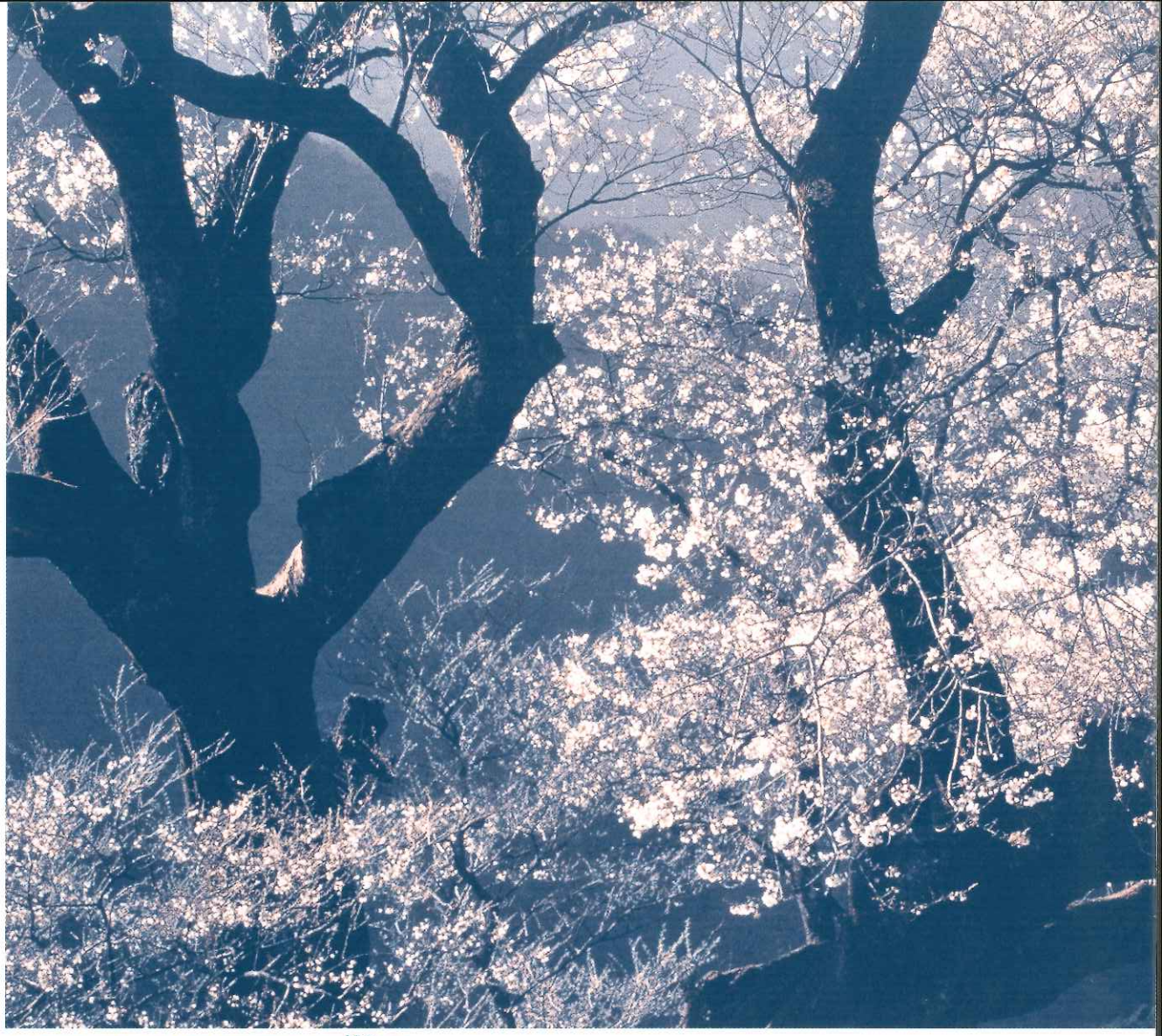
高知県立文学館ニュース

藤並の森

Vol.12



●「吾川村のひょうたん桜」（写真提供／横山主子氏）

リレー随筆⑫　上林　暁先生 ―― 佐々木正夫

高知県大方町出身の作家・上林暁先生の作品をはじめて読んだのは昭和二十三年である。京都への旅先だった。四国へ帰る夜行列車の汽車待ちに、駅前で「自選短篇小説」を特集した雑誌を買った。本屋ではない。裸電球を一つぶら下げた屋台店である。

夜汽車は京都発なのに、宇野まで立ちづくめだった。車中、雑誌の中の「四国路」を読んだ。それが上林暁との出会いであった。そのころ、不勉強なわたしは、先生が四国出身ということを知らず、四国という題に魅せられて読まされたのに過ぎない。

『昭和十九年の秋、私は九年ぶりの帰郷だった』――小説「四国路」の書き出しである。主人公の「私」は、業病の妻を病院に残して、末娘を郷里へ疎開させるための四国路だった。単調なすじ書きだが、何度も読み返した。小説のうまさもさることながら、作者の誠実な創作態度に胸打たれた。

それからのわたしは、少し大げさにいえば、あちこちの古本屋をあさり、上林暁を読んだ。先生の作品は私小説だから、まだお訪ねしたことのない東京の阿佐ケ谷周辺や、駅から十五分ばかりの天沼（あまぬま）のお住まいなど、道順が書けるほど上林暁の虜になった。

「四国路」を読んでから七年――昭和三十年、わたしは小説「天沼の家」を書き、掲載誌を先生にお送りした。それがきっかけになったわけでもないが、定期便の文通がはじまったような気がする。しかし、地方の文学青年がやるような押しかけ訪問や、「原稿を読んでほしい」と生原稿を送るなど、一度もしなかった。

それから三年。「四国路」から十年目、わたしは天沼の家をお訪ねした。「ぜひ、お寄り下さい」、何度もお手紙をいただいていたが、先生のお仕事にご迷惑をかけては、と遠慮ばかりしていた。そういうわたしだが、昭和三十七年には、高松で二人で泊まるなど意気投合は早かったようである。先生がNHKのお仕事で郷里へ帰られ、東京へ引き返すとき高松で二日ばかり、栗林公園や屋島などへごいっしょした。宿は、志賀直哉の「暗夜行路」の主人公・謙作が泊まった屋島館を希望されたが、満員で港近くの宿で夜遅くまで酒を飲んだ。

二度目の脳出血はその年の十一月である。以来、十八年もの長い闘病生活がつづく。その間、先生が第一回川端康成文学賞を受賞されたとき、招かれて上京したり、大方町の生家で一人留守居していたご母堂のお見舞に出かけたこともある。先生が亡くなられたときは、入野松原近くの墓地へ葬送に行った。上林暁文学館（大方あかつき館）の開館式に駆けつけるなど、上林暁はわたしの心の中で生きつづけている。

わたしの書斎には、先生が闘病中、お見舞に出かけたときいただいた左手の草稿を軸装して掛けてある。読める字ではない。ミミズがくねったような線画だ。眺めていると、涙が出る。

（壺井栄文学館館長）

高知県立文学館

◆次回企画展によせて◆

寺山修司展 テラヤマ・ワールド
―きらめく闇の宇宙

2001年4月28日(土)～6月3日(日)

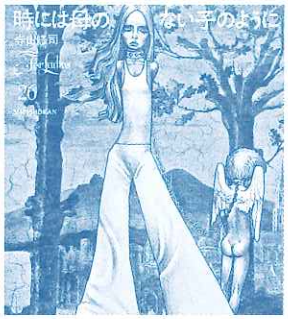
寺山　修司
1935～1983

「寺山修司という名前を聞いたことがありますか」。

ほとんどの人は、もちろん知っているとか、耳にしたことがあると答えるだろう。詩人・作詞家・エッセイスト・演劇作家・写真家などなど多くの顔を持つ寺山修司。高等学校の教科書にも彼の歌は紹介されている。それでも知らないという人には

♪時には母のない子のように
だまって海を見つめていたい
時には母のない子のように
ひとりで詩など書いてみたい♪♪

の、カルメン・マキの歌で有名なこの詩はどうだろう。寺山修司とはいったい何者だろうか？



詩集
「時には母のない子のように」

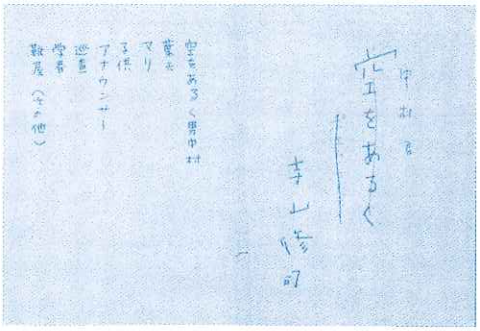
私は一九三五年十二月十日に青森県の北海岸の小駅で生まれた。しかし戸籍上では翌三十六年の一月十日のことになっている。この三十日間のアリバイについて聞き糺すと、私の母は「おまえは走っている汽車の中で生まれたから、出生地があいまいなのだ」と冗談めかして言うのだった。

～「誰か故郷を想はざる」～

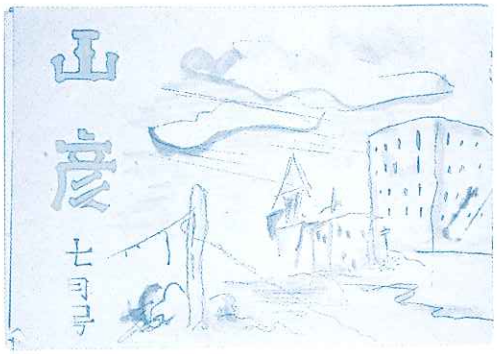
寺山修司の少年時代は寂しいものであった。父は召集され戦病死、青森大空襲で焼け出された母と修司は、父の故郷・古間木（現三沢市）に身を寄せた。終戦後、アメリカ軍が進駐した三沢で過ごした多感な少年時代の体験は、彼の作品の原風景となっている。

中学時代の修司は、映画館・歌舞伎座を経営する親戚に引き取られ、家業を手伝いながら映画を見たり、同級生の京武久美と俳句を作ったりの生活を送る。高校生になった修司は、文学部、新聞部に属し、京武らと「山彦俳句会」を創設した。全国詩誌「魚類の薔薇」なども発行し言葉への興味を増していった。全国の高校生に呼びかけた〝初めての十代の俳句研究〟「牧羊神」も創刊、エネルギッシュな行動力を現している。

そして、『チェホフ祭』が「短歌研究」（昭和二十九年十一月）の巻頭に載り、文学界に鮮烈なデビューをした。「われに五月を」「空には本」「田園に死す」「書を捨てよ、町へ出よう」などの作品を次々発表し、寺山修司は大胆な新しい作風の短詩型作家としての地位を築いていく。そんな中、ネフローゼを患い三年間の長い闘病生活を送らなければならなかった。しかし、病気を克服した時の創作意欲は、堰を切り活字の世界を越え、脚本、戯曲へと広がっていった。ビルの屋上から身投げした男が、地上に落下せず空中に浮いてしまう「中村一郎」は、はじめてのラジオドラマである。活気あふれる六〇年代を背景に、小説、評論、ラジオ、テレビ、映画、演劇などの寺山作品は、大胆な着想と強烈な個性のひかりを放ちながら、ほとんど同時多発に発表された。寺山の才能は、谷川俊太郎、武満徹、篠田正浩、横尾忠則など多くの友人をも作っている。

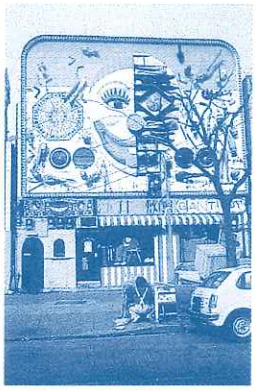


ラジオドラマ・デビュー作
「中村一郎」生原稿冒頭



「山彦」7月号

一九六七年、寺山は演劇における見世物の復権、幻想演劇による時代への告発をテーマに演劇実験室「天井桟敷」の旗揚げをする。この劇団の誕生は社会的な事件として取り上げられ、アングラ演劇の到来となった。第一回作品「青森県のせむし男」第二回「大山デブコの犯罪」第三回「毛皮のマリー」次々と話題作が上演され人々の注目をあびた。一九六九年には、粟津潔デザインの奇抜な「天井桟敷館」がオープンし、道行く人々を驚かせ渋谷街の名所のひとつになった。「人力飛行機ソロモン」の上演は劇場を市街に移し新宿一帯を使って繰り広げら



当時の天井桟敷館正面

怪優奇優侏儒巨人美少女募集！
―さあさあ、お立ち会い！
（天井桟敷の団員募集）

れた。天井桟敷の演劇は、想像力を組織しながら、政治を通さない革命へと向かい、「疫病流行記」「釘」「奴婢訓」などが上演された。さらに寺山の演劇は文芸言語の演劇行為から、空間言語、肉体言語、音楽言語を持った総合芸術としての演劇を試みるようになる。一九六四年、放送劇「山姥」がイタリア賞グランプリを受賞、寺山の演劇や映画はヨーロッパの国々で上演され、高い評価を受けた。寺山の演劇空間は、異空間・大空間、異次元へと拡大し始めた。

なみだは
にんげんがつくることのできる
一ばん小さな海です
つきよのうみに
いちまいの
てがみをながして
やりました
つきのひかりに
てらされて
てがみはあおく
なるでしょう
ひとがさかなと
よぶものは
みんなだれかの
てがみです

～「寺山修司少女詩集」～

寺山は「ひとりぼっちのあなたに」「赤糸で縫いとじられた物語」「愛さないの愛せないの」などの少女のためのメルヘンシリーズ的な作品群や、作詞なども手がけている。これらいずれにも深く澄明な抒情詩人としてのきらめきが輝いている。

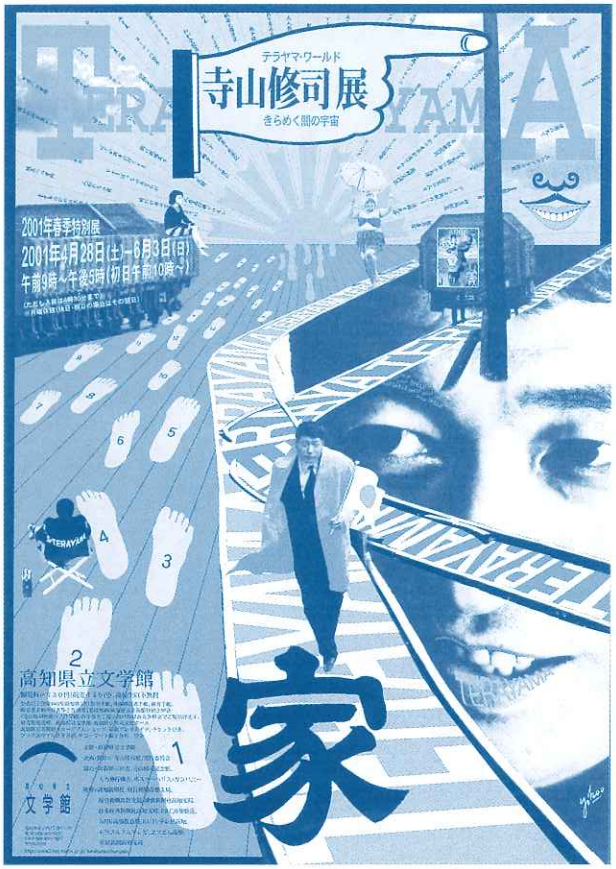
少年時代の俳句から始まり短歌・詩・評論・エッセイ・演劇・映画・写真など多彩なジャンルで才能を示し、前衛的な成果を四十七年間という短い生涯で数多く残している。そして死後十八年が過ぎた今なお多くの人々に、青春の思い出とともにさまざまな影響を与え続けている。

そして生前の彼を知らない世代には、「アヴァンギャルド・カリスマ」ととらえられているという。

寺山修司とは何者だったのか？　そして死後もなお走り続けようとする情熱の源とは？

寺山修司を探る手がかりは、母・はつからすべての遺品や資料が寄贈され、少年時代を過ごした三沢の「寺山修司記念館」にある。ここに収められた収蔵品の中から厳選して「寺山修司展」が開催される。寺山修司とともに歩み、今なお寺山ワールドから影響を受け続けている九條今日子氏（元夫人）、演劇を引き継いだ演出・作曲家J・A・シーザー氏ら多くの方々の協力を得、映像も入れて構成する。拡大し続ける寺山修司の宇宙に触れ、彼が何者だったのかを、この「寺山修司展」で、探っていただければ幸いです。

（学芸課　嶋崎るり子）



ポスターデザイン　横尾忠則

「花嫁化鳥」
寺山自身が呪術的な素材や土地などを訪ね、一九七三年一月から一年間雑誌「旅」に連載されたものをまとめた紀行文。闘犬史や犬神伝説などに興味を持ち高知にも取材に来ている。

関連行事

●**オープニング式典　4月28日（土）午前10時より、高知県立文学館にて**
九條今日子氏（寺山修司元夫人）、J・A・シーザー氏（演出家・作曲家）諸氏によるテープカット

●**記念トーク　4月28日（土）午後1時半より高知城ホールにて**
「寺山修司を語る」――九條今日子氏、J・A・シーザー氏

●**記念講演会　5月13日（日）午後1時半より高新文化ホールにて**
「時代を挑発する～寺山修司をめぐって～」
――山口昌男氏（文化人類学者・札幌大学学長・「寺山修司展」監修）

●**朗読の会　①4月21日（土）午後2時より文学館にて**
「寺山修司・ことばのゆりかご」
②5月19日（土）午後2時より文学館にて
「寺山修司ポエムの世界・五月をうたう」

●**高知県立美術館特別上映会　寺山修司映像パノラマ館**
①4月30日（祝・月）　②5月4日（祝・金）両日とも午前10時より
高知県立美術館ホールにて　5プログラム上映
長編映画から実験映画、脚本作品など寺山修司の映画作品20本を上映。

高知への旅から70年　歌人 吉井勇 点描

妻鳥　季男

吉井　勇・高知「友の家」にて

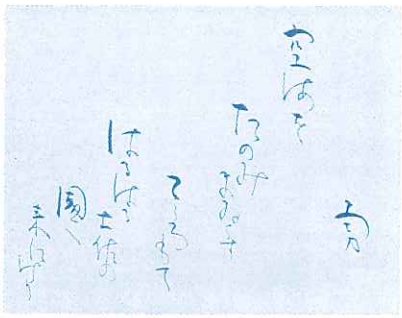
昭和六年五月、われはじめて土佐の國に遊びぬ。海は荒かりしかども空あかるく、風光の美そぞろにわが心を惹くものありき。

歌人吉井勇が高知の印象を歌集「人間経」にこう記した日から七十年の歳月が過ぎた。

千葉大学教授であった故太田三郎博士は、「吉井勇の生涯を考えるとき、四国は大きな意味をもっている。

あの失意の生活から立ちなおる契機をえたのが土佐の生活であった。

高野山に参詣したということは、四国時代に見られる宗教意識を考える上に重要な意義をもってくる。」（吉井勇と四国）



「人間経」
空海をたのみまゐらすこころもて
はるばる土佐の國へ来にけり

と記している。

勇がはじめて四国に来たのは、昭和五年四月愛媛県の宇和島市を訪ね、帰途松山市に立ち寄り、郊外の石手寺あたりで、牧歌的な風物詩として四国遍路を見た。

そして同年夏、高野山に登り、宿坊常喜院に約一カ月滞在「弘法大師伝」と大師の著作「三教指帰」を借覧したが、これによって宗教観が変わってきたようである。

山を下って宇和島を再訪。「人間経」に、

昭和五年八月、わが世の煩ひを忘れむとして浪速津より遠く四國路にかけての旅に出でぬ。さすらひの身の夜ごとの夢の愴然たりしこといまに忘れず。

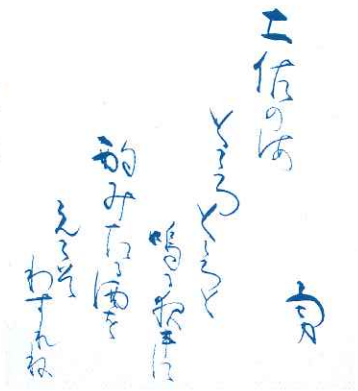
と詞書して、

身は雲に心は水にまかすべう旅ゆくわれをとがめたまふな

と詠んでいる。

後年、勇は「私の履歴書」で、「昭和三年三月には角筈にあった邸宅も売り、借家生活をする様になった。そうなるとだんだん交友も少なくなったので、東京にも居辛くなり、私はたった一人で神奈川県下の南林間都市に住んでいたが、そこにも落着くことができず、ほとんど旅で暮らすようになってしまった。」と回顧している。そうして、東北・信越・北陸など、漂泊の旅を続けるが、その延長で、四国・高知へ来られたのではないだろうか。

吉井勇は、明治十九年十月八日、伯爵吉井幸蔵の次男として出生、明治四十三年九月、若冠二十五歳で、第一歌集「酒ほがひ」により、歌壇に新風を送ったが、これに生涯の代表作



「人間経」
土佐の海とどろとどろと鳴る夜半
に酌みたる酒をえこそわすれね

かにかくに祇園はこひし寝るときも
枕のしたを水のながるる

君にちかふ阿蘇のけむりの絶ゆると
も萬葉集の歌ほろぶとも

をおさめ、遊里の風物とそこに生きる女性とのかかわりの中に、享楽する遊子の姿を描き、祇園歌人の名をほしいままにした。

大正二年第二歌集「昨日まで」を出版したが、内容は「酒ほがひ」の延長の中に、芝居の情景や役者、寄席芸人を題材としたものが散見する。これは前人未踏の歌境で、後年演劇の歌ばかりの歌集「鸚鵡石」「悪の華」を世に問うた前兆といえよう。

大正四年に、「片恋」・「祇園歌集」、同五年「黒髪集」、「東京紅燈集」、「未練」、同六年「祇園双紙」など華やかに活動するのであるが、大正五年、赤木桁平の「遊蕩文学の撲滅」で俎上にのせられたことは、「酒ほがひ」以来の御自分の業績をかえりみて、大きい衝撃を受けたであろう。

大正十年柳原義光伯爵の二女徳子と結婚、翌年長男滋が誕生したが、夫人との間は必ずしも琴瑟相和するようなものではなく、後年破綻する萌しが早くからあったようである。

大正十五年五月、父幸蔵の隠居により家督と共に大きな負債も相続し、伯爵となり、父同様貴族院議員を志望するが、伯爵議員の補欠選挙で有馬頼寧伯爵に敗れた。

これらのことが、ご自分でいう「世の煩ひ」、また太田博士の指摘する「失意の生活」であったと思われる。そうして、このような事件の度に、執筆の依頼が激減—つまり作品が売れなくなると、経済的には行き詰まってくるであろう。こうしたことは、次の、土佐隠棲中の回顧作からも推量できるようである。

酒の銭たばこの銭も無しと書きし土佐の日記をふとも見出でつ

「鸚鵡石」

昭和八年八月、永瀬潔のすすめで現在の香北町猪野々を訪れ、鉱泉宿香美屋に一カ月余滞在、十月中旬東京に帰ったが、これを待ってでもいたかのように、十一月警視庁が不良ダンス教師を検挙、その中の一人の口から徳子夫人の名が出て、夫人は一晩留置されるし、勇に対し

ては伯爵の栄典を停止せられ、後日爵位を返上する羽目になった。

昭和九年四月、われふたたび土佐に入りぬ。山嶮しく海荒しといへども、この地の人ごころの直ぐなることは、げにうるはしき埴安の郷のここちこそすれ、片雲の風にさそはるる身も、いでやここにささやかなる廬を結ばめと思ひ定めぬ。

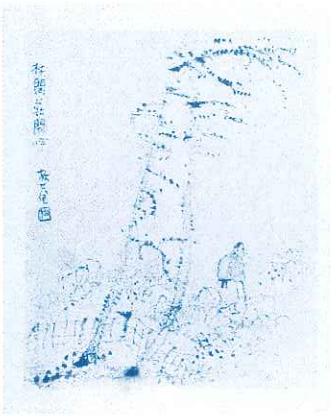
四國路へわたるといへばいち早く遍路ごころとなりにけるかも

空海をたのみまゐらす心もてはるばる土佐の國へ來にけり

大土佐の韮生山峡いや深くわれの庵は置くべかりけり

と「人間経」に記し、この年十一月、現存する草庵「渓鬼荘」を造った。

歌集「人間経」について勇は「この歌集は大きな人生の転機を意味する」また、「流離放浪の痴夢を捨て、人生の悲哀に直面した新生の第一作品集となった。」と記している。



「人間経」口絵

昭和十二年十月、かねて「遠ゐる人」と詠み続けてきた國松孝子と結婚、高知市築屋敷に新居を構えた。「私がこうして孝子と結ばれたことは、運命の神様が私を見棄てなかったといってもよく、これを転機として私は、ふたたび起つことができたのである。」（私の履歴書）

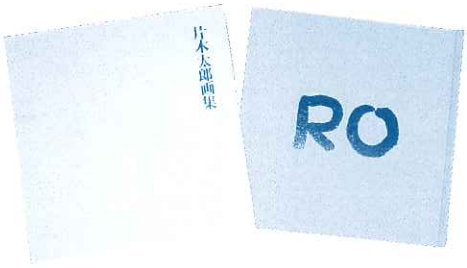
高知市で一年間過ごし、京都へ移住後は目覚ましい著作活動をするのであるが、昭和二十三年からは新年歌会始の選者を終生勤め、また、日本芸術院会員に推薦されるなど、起伏の多かった人生行路に、明るい光明が射しはじめた。

晩年はおおどかな枯淡の味わいを滲ませ、歌壇・文壇を超越して、閑寂幽玄の境地を追求せられていたが、昭和三十五年十一月十九日、七十五年の御生涯を閉じられた。

渓鬼荘

閲覧室から

『片木太郎 画集』



この春第四十五回県出版文化賞を受けた。「私家版」。一階閲覧室でもみられる。

平成十一年四月、七十二歳で急逝された片木太郎さんの画文集。ご遺族、英子さんらによって昨年一月に刊行された。

第一部「絵画」には、自画像、家族らを題材にした「人物」十二点、昭和二十六年の水彩「青の風景」、二十七年県展特選「暗い風景」から、平成十一年「海の門」までの身近な高知風景の収まる「風景Ⅰ」に三十三点、昭和四十六年以来三回の渡欧から生まれたヨーロッパ風景の「風景Ⅱ」に十五点を収めている。苦悶した若い頃から、片木ワールドと呼ばれる世界へと洗練され深まっていく画業のあとをたどることができる。風景の中の点景人物に自分自身が登場する。そこで、風景とともにあった片木さんに会える。色彩は鮮やかで詩心に満ちている。

第二部「文集」には、ヨーロッパなどの旅や、県展初期の頃からの想い出など。誠実あふれる文章でつづられている。

真摯に生きたその生涯を懐かしく偲ぶことができ、のこる者に安らぎと力を与えてくれる。（明）

県内同人誌紹介

『温（おん）石（じゃく）』

温石が発刊して一一九号を数える。そろそろ十年という記念すべき年を迎えたのに、巷では「おんせき」だの「ぬくいし」だのと呼んで下さる。そもそもは、焼いた石をボロにくるんで懐中の暖をとり、旅をしたという石であり「おんじゃく」という。焼いても崩れず、温もりを長く保つ温石こそこの集団の願望であり、大きなきづなでもある。歌の道は旅でもある。温石を懐にする旅も、足速く過ぐるもの、肩を寄せ合いゆっくりと歩むもの、杖を頼りに、己の軌跡を歩むもの、その誰もが、温石を懐にしてほしいと念じている。

ここに集う人達は、共に喜び、共に悲しむ心を歌に託したいとねがっている。歌を作るきびしさも、喜びも、それが人生という生きがいに、深くかかわっていることを忘れない。「温石」はこうして同志と歩み、同志に加わってくれる喜びをかみしめながら、歩みつづけている。

温石をふところに。（今井嘉彦）

発行所　高知市福井扇町二七―一八
温石短歌会
電話　八二三―四〇七六

土佐文学さんぽ 10

土佐のカルメン

浜本 浩

物部川流域

この頃の時惠には、寅吉がたつた一人の相談對手だし、亭主の留守には、この男ばかりがたよりでもあつたので、

「寅吉さんが、他國へ出たら、あとが寂しうなる」と、沁んみりと答へた。

「誰が寂しがるものぞ。私が死んだら、烏が鳴いてくれるばかりじゃ。あツはツはツはツ」と、寅吉は、取つて附けたやうに笑つた。

時惠には、その笑ひ聲が、胸を掻きむしるやうに聞えた。すると、長い間忘れてゐた奔放な感情が、突然殻を破つて迸り、

「私が、私が寂しうなる。寅吉さん、私は、お前さんと別れとうない、許しておくれ」と、喚きながら、寅吉の膝に獅嚙みついた。

浜本浩（一八九〇～一九五九・松山市生まれ、六歳時より高知へ）といえば、大正時代中期のアナーキーな青年たちをのびやかに描いた〝浅草もの〟（「十二階下の少年達」「浅草の灯」等）が浮かんでくる。が、「土佐のカルメン」「軍鶏」など、土佐の山村に題材を得た一種の情痴綺譚ものも忘れ難い作品である。

人間関係において結構、屈託多い前半生を送った浜本の〝暗〟の部分がさり気なく分泌されているようで、軽視できないのだ。「土佐のカルメン」（昭和七年八月、文芸春秋銷夏号）は、旧習の蛮行まかり通る物部川流域の香北地方を舞台にした実録的読み物で、淫奔な若妻の底に潜む冷酷さがテーマとなっている。

男に簡単に肌を許す時惠は、隣村の樵夫、幸蔵と平凡な結婚をして落ち着いたかにみえたが、ある日、前科者の寅吉が村に帰ってくる。彼は姦通した女房を草刈鎌で斬り殺し、八年間獄中にあった激情の男である。

長い間、女ひでりであった寅吉は、時惠に巧妙に近づく。真面目一方の亭主に心身の不満をつのらせていた時惠の淫蕩の血が騒ぐ。二人は村内の噂となる。九州逐電を企む二人は幸蔵を自殺と見せかけて殺害するが、赤岡署の一警部補の執念の捜査によって露顕。やがて死刑判決、刑場の露と消えるまでを推理小説仕立てで展開、一気に読ませる面白さがある。

＊　＊　＊

作家として自立するまでの浜本は、蓋しきれぬ煩悶の連続にあったようで、生母との離別と再会、継母、異母弟妹たち、落第、父との葛藤、不良少年生活、私娼との恋と別れ、結婚、別の女と出奔……とその尋常ならざる変転ぶりは、三十歳後半までつづいた。一連の山村情痴ものは、そんな彼が、軽く搦みとってみせた意味深い作品といえよう。

一方、大正時代中期のオペラの舞台裏を描いた代表作「浅草の灯」（昭和十二年）は趣向が、がらりと変わる。女優、ペラごろ、貧乏画家、大道博奕打ち、掏摸たちが、カフェー、劇場、私娼窟、射的屋ひしめく浅草の路地裏を下駄ばきで闊歩する躍動感に満ちた小説である。

浅草という外界の風に、彼の前半生がアナーキーに拡散、とめどなく流れ出たような開放感がある。

迂余曲折に満ちたそれまでが、あっさりと漉されたような代表作を得るまでの浜本の、文学的苦悩がしのばれるというものだ。

（国則三雄志）

見どころ＝●轟の滝
●大荒の滝
●アンパンマンミュージアム
●渓鬼荘
●日の御子川渓谷

交　通＝ＪＲバス・土佐山田駅より香北町美良布まで一日八便（美良布、高知間の直通便なし）

資料受贈報告
（平成十二年十二月～十三年二月）
敬称略

▼**織田篤子**・「（ビデオ）女たちの自由民権ＩＮ ＴＯＳＡ ビデオをつくる会制作」▼**外崎光広**・「外崎光広著作目録と諸氏による書評 外崎光広編刊」▼**高知アララギ発行所**・「海紅集 楠瀬兵五郎 高知アララギ発行所」▼**山下一郎**・「藤原咲平先生の思い出 山下一郎 中央企画」ほか▼**井上孝夫**・「萬葉辭典 佐々木信綱 中央公論社」ほか▼**岩崎義郎**・「高知城を歩く 岩崎義郎 高知新聞社」▼**俳誌『壺』発行所**・「芭蕉の風Ⅳ 杉本恒星 俳誌『壺』発行所」▼**妻鳥季男**・「資料・詩歌集 別子銅山 芥川三平 正岡慶信」▼**岡崎昭平**・「（ビデオ）よみがえる大町桂月 岡崎昭平制作」ほか▼**文芸誌ＰＯＥＭ発行所**・「（文芸誌）ＰＯＥＭ３００号記念作品集 文芸誌ＰＯＥＭ同人編 文芸誌ＰＯＥＭ発行所」▼**森沢光**・「夏木立（随筆集）森沢光著刊」▼**坂井久代**・「（作品集）紅梅 坂井久代 短歌芸術社」▼**徳弘久**・「樗の花 徳弘久 はがらみ書房」▼**中町子菊**・「卑弥呼のくに土佐 中町子菊 成甲書房」▼**横山隆一**・「招福干支色紙［巳］横山隆一揮毫 荏柄天神社」▼**田中励儀**・「濱本浩草稿［壁虎］（やもり）六枚」▼**桃谷政順**・「寺田寅彦 草稿 随筆［池］十一枚」ほか…大正十三年十一月、東京帝国大学理学部会誌に掲載された随筆「池」の草稿。「東京帝國大學理學部會」と印刷された四百字詰原稿用紙に書かれており、末尾には大正十三年八月十一日の記載があります。「池」は東京帝国大学構内にある

◆◆◆文学館日誌 2000年12月～2001年2月◆◆◆

12月

◆1日(金) 山下一郎氏ご来館。

◆3日(日) 田岡嶺雲展終了。会期中の入館者約一、五〇〇名。

◆9日(土) 第3回文学カレッジ「植木枝盛と詩歌・俗謡」。講師・外崎光広氏。文学館ホール。

◆16日(土) 第12回朗読の会開催。「まつりご」「雨後の日」(朗読・野中久美子さん)。文学館一階ホール。参加者35名。

◆25日(月)～1月1日(月) 年末年始休館。

1月

◆2日(火) 年末に受贈した横山隆一先生の「巳」の色紙の紹介があり閲覧室に展示することとなる。

◆13日(土) 第4回文学カレッジ「上林暁と田中英光～土佐の私小説」講師・山川禎彦氏。文学館一階ホール。

◆27日(土) 第13回朗読の会開催。宮沢賢治作「セロ弾きのゴーシュ」(朗読植田省三さん)、マーガレット・ミッチェル作「風と共に去りぬ」より抜粋、市原麟一郎監修「土佐とんとむかし」より(以上朗読大川紀男さん)。文学館ホール。参加者約80名。

◆28日(日) 群馬県立土屋文明記念文学館石山幸弘氏来館。

◆30日(火) 当館名誉館長、安岡章太郎氏『鏡川』で大佛次郎賞受賞贈呈式。

2月

拓本教室

◆3日(土)・6日(火) 拓本教室～吉井勇の歌碑を使って～。文学館一階ホール。講師・妻鳥季男氏。受講者15名。

◆10日(土) 第5回文学カレッジ「土佐の方言詩について」講師・小松弘愛氏。文学館一階ホール。

◆11日(日) 「寺山修司展」の打ち合わせのため、九條今日子氏外ご来館。

◆17日(土) 第14回朗読の会～「菜の花忌によせて」～。司馬遼太郎作「この国のかたち」より抜粋(朗読川添教代さん)。「功名が辻」より抜粋。福田みどり作「うちの宿六」(朗読松田光代さん)。文学館一階ホール。参加者60名。

第14回朗読の会「菜の花忌に寄せて」

◆20日(火)「アルプスの少女ハイジ」写真展開幕。／大町桂月・大原富枝文学を偲ぶ関連企画ビデオ上映会。参加者約90名。

◆21日(水) 園田学園女子大学ご一行様来館11名。

◆22日(木) 高知女子大学博物館実習講義22名来館。

◆23日(金) 奈良県明日香村ご一行様31名。／漢字文化振興会白石氏(東京)来館。

◆24日(土)「アルプスの少女ハイジ」映画上映会(アニメ二本)。参加者約70名。

◆25日(日)「アルプスの少女ハイジ」映画上映会(実写)(アメリカ'93年字幕スーパー)。参加者80名。

◆28日(水) ハイジ関連「本の読み聞かせ」。高知こどもの図書館のみなさん。文学館2階ロビー。

「アルプスの少女ハイジ」写真展

＜訃報＞

さる三月一日、アメリカ在住であられた小川恭子さん(森下雨村長女)が、また三月十一日、東京目黒にお住まいであられた梯美穂さん(田中貢太郎二女)が亡くなられました。

これまでのご協力を感謝申し上げるとともに心よりご冥福をお祈り申し上げます。

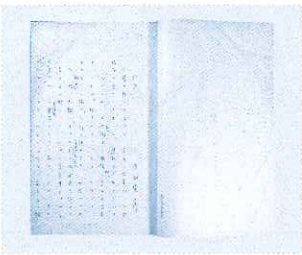
田岡典夫　書簡
(山村瑞子氏寄贈)

池をテーマとしたもので、前年の関東大震災により大学が大きな被害を受けた際、池周辺の生物にも災害が及んだ事にふれ、池に関わる動植物の生態や学術的な実験のことなど、科学者らしい視点で捉えています。

▼山村瑞子・「田岡典夫 書簡 山村(杉村)瑞子・元彦宛三六八三通」…寄贈者山村(旧姓杉村)瑞子さんが小学生の頃、ご自身の作品(詩)が「こども高知新聞」に掲載され、それが田岡典夫の目に留まり文通が始まりました。昭和二十六年一月十七日付の葉書が最初で、田岡の死の前年である昭和五十六年十一月まで続いています。総数三六八三通の内訳は、葉書一八三通・封書一八〇通とほぼ同数となっています。内容は、創作についての批評・指導や自身の作品に関わることなど多岐にわたっており、今後詳しく見て行くことによって、田岡典夫の作品に関して今まで知られていなかった側面が明らかになってくる可能性もあり、期待が持たれます。

このほか、全国のたくさんの方々や関係機関から数多くの資料をご寄贈いただきました。厚く御礼を申し上げます。

◇資料写真「寺田寅彦 草稿」「田岡典夫 書簡」



寺田寅彦　草稿
(桃谷政順氏寄贈)

高知県立文学館ニュース　第十二号　平成十三年四月一日発行　〒七八〇―〇八五〇　高知市丸ノ内一丁目一番二〇号　電話〇八八―八二二―〇三二　FAX〇八八―八七一―七八五七

高知県立文学館カレンダー

2001年

4～6月

4月――April	5月――May	6月――June

催しもの

ミニ企画展 **【川端康成ほか作家直筆原稿展】**

越知町在住の元編集者・山本有光氏が、知遇を受けた作家たちの直筆原稿類を展示紹介します。

■3月1日(木)～4月15日(日)

※常設展示室内にて展示中（常設展示観覧券でご覧になれます）

※主催…高知県立文学館、越知町立横倉山自然の森博物館

■内容…川端康成、井上靖、江藤淳、安岡章太郎、開高健、平野謙、三浦哲郎、吉行淳之介、和田芳恵の直筆原稿や直筆色紙、風間完の文芸雑誌「風景」表紙絵原画等。

講座など

平成13年度専門講座 **「近世土佐の文人たち」**

高知城築城四百年の今年は、近世土佐の文人たちについて文学鑑賞をしながら学びます。

講師…竹本義明先生（土佐女子中学・高等学校教諭）

＜日程＞13:30～15:00

1．4月7日(土) 谷真潮　　4．9月8日(土) 北原秦里

2．4月22日(日) 尾池春水　　5．9月30日(日) 日根野鏡水

3．6月9日(土) 今村楽

●ハガキに住所、氏名、電話番号を明記の上、文学館まで送付くださるか、当館受付にて直接お申し込み下さい。

定員100名（先着順）。

「漢字文化講演会 －21世紀に伝える漢字文化－**」**

6月30日（土）午後1時半～4時

於：高知城ホール（4F）

加藤道理先生（元桜美林大学教授）

「漢字の成り立ちから見た教育」

石川忠久先生（二松学舎大学学長）

「日本の漢詩

－そして土佐の漢詩人－」

定員200名。入場無料（但し整理券必要）

参加希望の方は館受付で、又はハガキに〒住所、氏名、電話番号を記入し「漢字文化講演」係まで申し込みを（先着順）。

特別企画展

2001年春季特別展予告

テラヤマ・ワールド

～寺山 修司 展～きらめく闇の宇宙

4月28日(土)～6月3日(日)

関連催しもの

●4／28(土)

10：00～　オープニング式典　文学館にて

13：30～　記念トーク「寺山修司を語る」高知城ホールにて

定員100名　入場無料

往復はがきにて　※質問などもご記入ください。

九條今日子氏(寺山修司元夫人)、J.Aシーザー氏(演出・作曲家)

●5／13(日)　13：30～

記念講演会

「時代を挑発する―寺山修司をめぐって―」

高新文化ホールにて　定員150名　入場無料

往復はがきにて

山口昌男氏(文化人類学者・札幌大学学長・寺山修司展監修)

●4／21(土)　14：00～

朗読の会「寺山修司　ことばのゆりかご」

文学館にて　入場無料　朗読の会の方々による

●5／19(土)　14：00～

朗読の会「寺山修司ポエムの世界　5月をうたう」

文学館にて　入場無料　朗読の会の方々による

●4／30(月)、5／4(金)

高知県立美術館特別上映会

「寺山修司映像パノラマ館」

美術館ホールにて　有料

【休館日】4月――2，9，16，23日　　5月――1，7，14，21，28日　　6月――4，11，18，25日

次回特別展予定　夏季企画展「**土佐のむかしばなしと伝説～とんとむかしあったげな～**」(仮)

平成13年7月1日(日)～8月31日(金)

利用案内

開館時間　午前9時～午後5時(入館は、午後4時30分まで)

休館日　毎週月曜日(休日・祝日の場合はその翌日)
年末年始(12月26日～1月1日)

観覧料　一般350円
特別企画展のあるときは、料金が変わります。〔一般550円〕
20人以上の団体は2割引。高校生以下、高知県(市)長寿手帳所持者及び身体障害者手帳、療育手帳、障害者手帳所持者等とその介護者1名は無料です。

駐車場　なし。ただし近辺に有料駐車場があります。

貸出施設　企画展示室、ホール、茶室

交通のご案内

●高知空港より空港バスではりまや橋下車徒歩20分

●ＪＲ高知駅下車徒歩20分

●土佐電鉄電停高知城前下車北へ徒歩5分

●バス停公園通り下車北へ徒歩5分

高知県立
文学館
高知市丸ノ内1丁目1－20
電話　088・822・0231
FAX　088・871・7857
e-mail bungaku@tosa.net-kochi.gr.jp
http://www2.net-kochi.gr.jp/~kenbunka/bungaku/
〒780-0850